知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌［ココナッツクラブ］

COCONUTS CLUB

AUGUST 2018 8

街道看板紀行

其の三～昭和の常滑、散策篇

陶磁器会館西交差点の「呂」

大蔵餅常滑本店の「呂」

街道看板紀行

其の三　～昭和の常滑、散策篇

看板をクローズアップしたシリーズの第三弾は、
前回の大野から常滑街道を南へ進み、常滑の中心市街地へと入り込んでゆく。
貴重な看板を取っ掛かりに語られる思い出は、
当時を知る人には懐かしく、若い人には新鮮ではないだろうか。

看板になった巨大な甕

常滑街道を鬼崎方面から南へ向かい、セントレアラインを過ぎてすぐのところに、大蔵餅常滑本店がある。看板商品の「大蔵餅」で知られるだけでなく、今の季節には評判のかき氷を求めて遠くからも多くの人が詰めかける常滑きっての人気店だ。この店の玄関に「大蔵餅」と墨書された大きな甕が置かれている。高さは一・五メートルほど。下の四分の三ほどは白いが、上のほうは常滑焼の土管のような赤茶色をしている。異様なサイズ感と、オバケのQ太郎を思わせるフォルムが相まってどこかおかしみもあり、なかなかインパクトのある看板だ。

しかし多くの来店客は、この看板にはあまり気に留めないかもしれない。やって来た時は待望のかき氷や甘味に気もそぞろで足早に店内へ入って行くし、逆に食べ終えた人は満足げな表情を浮かべて次の目的地へと急ぐのだ。これに気が付いたとしても、「大きな常滑焼だな」と思うくらいだろう。何しろここのメニューは絶品なので、それも致し方なし。

大蔵餅から常滑街道を七〇〇メートルほど南へ進むと、名鉄常滑駅入口の「陶磁器会館西」交差点の角にも同じような甕が据えてある。これは看板ではないが、甕とともに十九人の作家が共同制作したという七福神の陶彫がずらりと並んでおり、常滑への訪問者を歓迎する看板のようなものであろう。そこに設置された案内板に、正体が記されていた。

それによると、これは「呂号兵器／㊢」と呼ばれ、戦時中に開発されたロケット推進戦闘機「秋水」の燃料を精製するための装置であるという。時代に応じて次々に多彩な製品を作り出してきたのが常滑焼の特徴だが、戦時中には軍用品も手掛けていたのだ。

燃料などの化学製品は酸性であるため、容器類はそれに耐えうるべく専用のものでなくてはならない。それらは「耐酸炻器」と呼ばれ、常滑では伊奈製陶（のちのINAX）などで大正時代後半から製造されてきた。太平洋戦争が勃発すると、それまでタイルが主産品だった伊奈製陶では耐酸炻器が取って代わり、主力になる。昭和十九年に「秋水」の開発が始まると、伊奈製陶に㊢の製造が命じられる。しかし生産が追い付かず、常滑の他の工場でも作られるようになる。常滑高等女学校や常滑国民学校高等科の生徒たちも学徒動員で生産に従事。やがて町じゅうが㊢生産一色になった。

ところが「秋水」はエンジンの開発が遅れ、終戦間際にようやく試験飛行を行っただけで計画は頓挫した。㊢も無用の長物となった。

案内板には「日本の歴史と常滑の常滑窯業の一時代を語りかけてくれ、平和の尊さ、平和の素晴らしさを再確認できる資料です」という文言とともに、「お茶の寿園」と記されている。寿園は、本町二丁目に総本店がある昭和二十三年（一九四八）創業の茶舗だ。さっそく訪ねて話を聞くと、これは会長の佐藤博之さんが平成十九年（二〇〇七）に設置したもので、平成の初めごろに縁あって陶榮から譲り受けたという。

明治十九年（一八八六）創業の陶榮は、やきもの散歩道にある国指定重要文化財の登窯を築造した窯元であり、近年は外装タイルと鋳造用湯道陶管のメーカーとして建築や鉄鋼の業界で存在感を示している（本誌2016年9月号「やきもの散歩道の歩き方」、2017年10月号「現在常滑焼の全体像」参照）。土管などの大物を手掛けてきた陶榮も、戦時中には㊢製造に携わっていたのだ。よく見ると、㊢には陶榮の屋号「㊥」マークが付いている。

戦時中の昭和十六年（一九四一）に生まれた佐藤さんは、終戦からしばらくの間は、行き場を失った㊢が町のあちこちに放置されていたのを覚えており

「子供の頃、よくこの中に入り込んでかくれんぼをしたなあ」と懐しむ。身軽な子供なら中に入るのは簡単だろうが、けっこう深いし、出るのはちょっと大変そうだが。

譲り受けてから街道沿いに常設するまでの間には、商店街のイベントに使ったこともあったとか。セントレア開港に常滑が沸いた平成十七年（二〇〇五）、商店街の中央にある「からくり時計」の広場に置いた㊗にススキを入れて、月見茶会を催したというのだ。このサイズだとススキもそれなりに長くないと様にならず、ボランティアが知多半島じゅうを駆け巡ってススキを探したという。

その後、大蔵餅の稲葉憲辰さんにも話を聞くことができた。大蔵餅は昭和二十六年（一九五一）の創業で、創業者である稲葉さんの祖父が社長だった昭和五十年代にはすでに㊗を看板として使っていた。当初置いていたものは破損してしまい、現在は二代目。店の近くの多屋にあった大正製陶が製造したものという。

本町と銀座と前田の時代

寿園にお邪魔した流れで、そのまま界隈（かいわい）を歩いてみることにしよう。

寿園の前の道は昔の常滑街道である。多屋から大蔵餅、陶磁器会館西交差点を経て樽水方面へと南下する県道252号大府常滑線（旧国道247号）は昭和に入ってから順次開かれた道で、もとは東側を並走する細い道が街道だった。沿道のうち、寿園あたりは常滑の中心商店街で、かつては「本町通り商店街」と呼ばれた。

知多四国第六十四番札所の宝全寺の先で小さな川を渡ると三差路に出くわす。旧街道はここで右に折れ、県道34号半田常滑線に出たらまた右に折れ、五十メートル先で今度は左に折れる。文章にするとややこしいが、要するに屈曲を繰り返して人家の密集地を抜けていた。一方、三差路を直進するのは成岩街道の旧道筋。INAXライブミュージアム北の奥条4丁目交差点付近で県道34号に合流し、半田市成岩方面へと東進する。

川より南の市場町は、本町とともに中心商店街の一翼を担ってきた地域だ。市場町のうち、県道252号と34号が交わる市場交差点から山方橋交差点までは「常滑銀座商店街」、旧成岩街道沿いは「前田商店街」と呼ばれていた。

つまり、かつての常滑中心部には、本町・銀座・前田と三つもの商店街組織が存在したのである。これらはのちに「とこなめ中央商店街振興組合」として統合し、昨年まで存続していた。

寿園の佐藤さんによると、最盛期の昭和三、四十年代には本町だけで六十軒もの店がひしめいていたという。「お客さんが本当に多くて、何でも売れたような時代だったよ。うちの店は三人の従業員でやっていたのだけれど、土日なんか三人とも昼食が食べられないくらい忙しかった」と当時を振り返る。売り出しも盛んで、夏には本町通りから前田にかけて七夕祭りを開催し、通りに七夕飾りがずらりと並んで壮観だったそうだ。七夕祭りは安城や一宮で今も毎年開催されているが、常滑は道幅が狭いので、七夕飾りの密集感は上を行っていたかもしれない。

常滑街道沿いに残る住所表記の琺瑯看板。店名の下に「本町通り」の文字が見える。

昭和40年代に本町通り商店街で開催された七夕まつり。寿園の前から北を見ている。（写真提供:常滑市企画課）

文化財でなくても、時代を映す看板は貴重な文化遺産だ。

サイクルセンタータケウチに展示されている看板群

常滑のキネマの掲示板

上／常滑映画劇場、下／晋明座（写真提供:常滑市企画課）

常滑中心部の現在の街並み。上2点は銀座、下右は本町

今に生き残る看板が、懐かしきの町の物語を語り始める。

自転車とキネマのこと

銀座通りを歩いてみると、面白い看板を二つ見つけた。

ひとつは「サイクルセンタータケウチ」の店先に飾られた三枚の木製看板である。黒塗りの板に文字やロゴを彫り込んだもので、金色の文字とカラフルなロゴが黒地に映え、なかなか重厚感のある看板だ。すべて文字が右から左へ書かれており明らかに戦前のものだが、状態がよく極めて美しい。

ほかにも「０１６５」「３４９５」と数字が記された車のナンバープレートのミニチュアのようなものが展示されている。これはかつて自転車に取り付けが義務付けられていた鑑札で、市町村が交付したもの。よく見ると小さく「知多 常滑町」「常滑市」と記されている。また、古いイギリス映画あたりに出てきそうなレトロな自転車も。これは「ペニー・ファージング」や「ダルマ自転車」などと呼ばれる種類で、大手メーカーのブリヂストンが店舗のディスプレー用に製作したものらしい。

店主の竹内将順さんによると創業は大正三年（一九一四）。銀座通りから旧街道を南へ二百メートルほど行った保示町のうどん店「三角庵」のあたりで竹内さんの祖父が始め、竹内さん自身も家業を継いでから五十一年目になる。こちらでも商店街の最盛期のことを尋ねてみると、かつては、昼間学校に通い、夜は伊奈製陶で働いた勤労学生が多く、伊奈製陶に自転車を納めていた時期があったとか。今も客には中学生や高校生が多いそうで、自転車屋は昔から変わらず学生の足を支える貴重な存在なのだ。

もうひとつの気になる看板はサイクルセンタータケウチの隣、商店ではなく民家にある。太い墨字で「常滑キネマ」と書かれており、看板というかディスプレーの一部のようなものだ。

聞けば、こちらは映画館の経営者だった方のお宅で、これは映画のポスターの掲示板だったという。「常滑キネマ」の文字の下は木製のシャッターで、それを引き上げるとガラス越しにポスターやスターのブロマイドが見られるようになっていたそうだ。

常滑キネマの場所は、先述の三差路から旧成岩街道を東へ二百メートルほど進み、左に少し入ったところ。県道に面していないので少しわかりにくい。なるほど、人通りの多い銀座通りにポスターを貼った方が集客には効果的だろう。

かつて常滑市街には常滑キネマのほか、芝居小屋が前身の晋明座、「常映」と呼ばれた常滑映画劇場の三館があった。晋明座の場所は銀座通りの真ん中あたりの、現在は駐車場とコインランドリーになっているところ、また、常映があったのは山方橋交差点から東へ七十メートルほどのところ。至近距離に三館が集まっていたわけだが、テレビがまだ普及していなかった時代には、常滑クラスの小都市でもこういう状態はそう珍しいことではない。キネマは東映・大映、常映は東宝・松竹、そして晋明座は日活・新東宝というように配給会社で棲み分けがなされ、当時の大手六社の映画がすべてカバーされていたのである。さらにもうひとつ、現在の大蔵餅常滑本店の裏あたりには、主に鬼崎地区の人が利用していたという喜久乃世映画劇場もあった。

再び寿園の佐藤さんに話を聞いてみると、キネマは三館の中で最も入場者数が多く、正月や盆ともなると二階の桟敷席までぎっしりだったという。あまりの混雑のため酸欠状態で頭痛を催す人が続出し、上映の合間にガスボンベで酸素が撒かれていたというから凄まじい。

「常滑小（現常滑西小）の二年生の時、学校の先生に引率されてみんなで観に行ったことがあってね。『自転車泥棒』というイタリア映画。私の父が配達用の自転車を盗まれたことがあったので、タイトルが印象に残っているよ。あと、よく覚えているのは、三船敏郎主演の『馬喰一代』。小学校三年生の頃だったけど、子供ながらに感動して大泣きしてしまったなあ。昭和三十五年頃は一週間ごとに新しい三本立てが上映されるというスケジュールで、毎週のように観に行っていたよ」

テレビの普及とともに映画が下火になってもキネマは最後まで残り、昭和五十年代まで営業していた。

散歩の締めくくりは喫茶店で

歩き回って少し疲れたので、一息入れてから終わりにしよう。

銀座通りから旧街道を七〇〇メートルほど南下し、保示四丁目交差点で県道に合流する。そのすぐ先にある喫茶店が今回の最後の目的地だ。その店の名を「壺」という。

シンプルにして大胆なこの店名は、店の前に置かれた看板が由来だ。そう、冒頭で紹介した㉑をこの店でも看板として使っているのである。

喫茶壺の㉑は、大蔵餅や寿園のものよりも一回り大きく、なんでも三千リットルの容量があるという。店主の加藤善子さんに聞くと、昭和四十七年（一九七二）に開店したとき、伊奈製陶より譲り受けたものだとか。そのイ

時がゆるやかに流れる空間で、あの時代を思い出すひととき。

ンパクトに刺激を受け、店名もそのまま「壺」とした。

店に入り、実に座り心地のよいソファに腰を落ち着けると、何とも言えずゆったりした心持ちになった。それは、古き良き昭和の喫茶店の雰囲気を今にとどめているからだろう。味わいのあるカウンター、その上に貼られたシックな色合いの柄入りタイル（伊奈製陶にオーダーメイドしたとのこと）、しゃれたライト、照明回りを木で飾った天井、タバコの陳列棚。凝ったデザインが随所に見られるが、いずれもさりげない感じがいい。店内に漂うくつろいだ空気は、店の年季や加藤さんの人柄があるからこそ醸し出されているに違いない。

この店は、常滑でもかなり早くにオープンした喫茶店のひとつという。「当初は喫茶店も少なく、若い人が集まれるような場所が少なかったので、仕事帰りの人たちがよく立ち寄ってくれていましたね。今は年配のお客さんが多いけど、昔は若者の憩いの場でもありました」と加藤さん。店にはその年配のお客さんたちが何人もいて、友達と一緒に、あるいは一人で、午後の時間を楽しんでいる。

コーヒーが疲れた身体に染み渡り、つい長居してしまった。

取材協力・資料提供◎稲葉憲辰さん（大蔵餅）／佐藤博之さん（お茶の寿園）／竹内将順さん（サイクルセンタータケウチ）／籾山久子さん／加藤善子さん（喫茶壺）／とこなめ陶の森／常滑市企画課
参考文献◎常滑市民俗資料館友の会「蒼穹」所収、「常滑の熱い日々383日」（渡辺榮造）／常滑の陶業百年（とこなめ焼協同組合）／子孫に伝えたい 常滑の街道（常滑の街道・発掘調査の会）
表紙写真◎喫茶 壺（常滑市樽水町）

※7月号P05の「昭和三十六年（一六九一）」は「昭和三十六年（一九六一）」の誤りでした。お詫びして訂正します。